闇に消えた地図製作者クリスティアン・スクローテン

小川　知幸

はじめに

1570年にアントウェルペンで刊行されたアブラハム・オルテリウスによる画期的な地図帳『世界の舞台』*Theatrum Orbis Terrarum*には，オルテリウスが編纂にあたって参照したさまざまな地図とその作者を列挙した「地図製作者名録」Catalogus Auctorum Tabularum Geographicarumが折り込まれており，そこに挙げられた地図製作者は，じつに183名におよんでいる[1]。そしてこの名録によってのみ，その地図の存在を知られる作者も決して少なくない。本稿で取り上げるクリスティアン・スクローテンChristian Sgrootenも，そうした一人であった。

スクローテンは手描き地図のすぐれた作者であり，代表作として「アトラス・ブリュッセル」Atlas Bruxellensis（1573年）と「アトラス・マドリード」Atlas Madritensis（1596年）という二つの浩瀚な地図集を遺したが[2]，そのいずれも印刷に付されず，官撰として秘匿されたために，後世に影響をあたえることもなく，彼の名も歴史の闇のなかに消えていった。

しかし，オルテリウスがスクローテンの地図を入手してみずからの地図帳のために参照したということは，当時の数ある地図のなかでももっとも精確な地図として少なくともオルテリウス自身には認識されていたのであり，じっさいに『世界の舞台』には，スクローテン作の7つの地図が言及され，うち3つの地図が掲載されている。

この数は，183名の作者のなかではまさにトップ・クラスであった[3]。

そこで本稿では，これまであまり知られていなかったクリスティアン・スクローテンという人物の生涯とその作品，そして，製作の政治的背景，地図の特徴などを紹介し，『世界の舞台』のオルテリウスや，アトラスの語源となった世界地図帳を生みだしたゲラルドゥス・メルカトルらの16世紀ネーデルラントに，いかなる地図製作者が活動を展開し，それぞれの地図を製作していたのかということについて，その一端をあきらかにしたい。

なんとなれば，名録に挙げられた地図製作者の大半は，オルテリウスらとほぼ同時代に生きた人びとであり，スクローテンはその顕著な一事例となるだろうからである。

※「スクローテン」の表記について

Christian Sgrootenの名前のつづりは，正書法のない初期近代の史料には，20以上のことなる書き方と組み合わせで登場する。たとえば，Christiaen，Chrestien，Kerst，Kersten，また，ファミリーネームでは，Groet，Groete，s'Groeten，s'Grooten，Schrootz，Schrot，Sgroet，Sgrootのごときである[4]。

現在の研究文献では，ほぼ上記のようにChristian Sgrootenに統一されているので，本稿でも，このつづりから日本語の表記をクリスティアン・スクローテンとしたが，-aenや-ienの低地ドイツ語圏の発音からすれば，クリスティ「アーン」，s'G-，Sch-では，「スク」よりは「スフ」ローテンのほうが，より現地語に近いのかもしれない。少なくとも「スグ」と濁音にはならないはずである（オランダ王国のGroningenは慣習的にフロニンゲンと表記される。だが，これもじっさいにはフロニン

1　小川知幸「世界を再構成する―オルテリウス『世界の舞台』のコンポジション―」『東北大学総合学術博物館ニュースレターOmnividens［オムニヴィデンス］』No. 39, 2011.11, p. 4-7.
2　Arend Lang, „Sgrooten, Christian“, in : Neue Deutsche Biographie 7, 1966, p. 131f.
3　またもう一人，ウィーンの医学教授であったヴォルフガンク・ラツィウス（Wolfgang Lazius, 1514-1565）の地図への言及が，これと同率である。
4　Robert W. Karrow Jr., *Mapmakers of the Sixteenth Century and their Maps*, Chicago, 1993, p. 480.

ヘンのほうが近い）。

日本では g を「フ」と読む習慣にとぼしく，また，f や v と混同されやすいことから，しばらくはこの表記をとることにした。

1. スクローテンの生涯

（1）地図製作者になるまで

クリスティアン・スクローテンは，1525 年頃に，クレーフェ太公領の南端にあるゾンスベック Sonsbeck という町で 4 人きょうだいの次男として生まれた[5]。ゾンスベックは現在のドイツ・ノルトライン＝ヴェストファーレン州にあり，デュイスブルク Duisburg から北西に 30 キロメートルほどの場所にある小都市である。父は市の法律家で，尚書（oppidi Sonsbeckensis secretarius），また後には裁判所書記（geswaren schrieber）も務めたピーテルという名の人物であり，母は町の裕福な商人の娘で，名をスティーネといった。

幼少期についての史料はほとんどなく，1548 年になってようやく，同じくクレーフェのカルカー Kalker という町の会計簿の記載から，クリスティアンがこの町で 1 グルデンを支払い，市民権と不動産を取得したことがわかる程度である。カルカーはゾンスベックからさらに 15 キロメートルほど北にある町で，毛織物と穀物の取引がさかんな商業都市であった。

兄ヤコブもすでに数年前からここに移り住み，おもに商人として活動していた。ちなみに，市民権の取得には最低制限年齢 21 歳という条件があり，そこからクリスティアン・スクローテンの生年が推定される。以後，都市カルカーは，スクローテンの生涯を通じての活動の拠点となった。

青年期の職業についても判明している事実は少ない。大学にも進学した形跡はないが，後年の地図に表れているラテン語知識は，高い教養水準にあったことをおもわせる。父ピーテルは，ケルン大学とルーヴァン大学に学籍登録されていたいわゆるエリートであったので，教養はその個人教授によって身につけたのかもしれない。

いっぽうで，トリーアに残された 1540 年代前半の手描きの地球図が，スクローテンの習作といわれている。この推定が正しければ，おそらくすでに 15 ～ 16 歳の頃から，地理学と地図製作に関心を抱き，修行をはじめていたのであろう。カルカーでは画工として生計を立てていたのかもしれない。

まもなくクリスティアン・スクローテンに転機がおとずれた。1553 年にスクローテンは不動産の売買を繰り返している。この年に父が死去したことで，その遺産が手に入ったのだろう。これによってにわかに裕福になり，同年 11 月には市のマルクト広場に面した立派な邸宅を購入した。しかしながら，その直後の翌年 6 月には，早々とそれを手放さざるをえなくなった。どうやら兄ヤコブの負債をかぶったらしい。おそらくこの頃に，スクローテンは地図製作をなりわいとして立つことを決意したようである。経済的困窮のみがその理由とはいえないが，当時，地図製作は，成功すればきわめて大きな収入を見込める仕事であったとおもわれる。ヴァン・オルトロワは，スクローテンの地図製作による生涯収入を，じつに 24,344 リーブルと試算している[6]。

これと同じ頃，地理学者ゲラルドゥス・メルカトル（Gerardus Mercator, 1512-1594）がデュイスブルクに移住し，自身の息子を含めて数人の弟子をとっていた。1552 年にユーリヒ＝クレーフェ＝ベルク太公ヴィルヘルム 5 世により大学設置準備のために招かれ，そこに永住することになったのである。スクローテンがここで徒弟として働いたという直接の証拠は存在しないが，後年，メルカトルと共同で地図を製作したことから，地図資料を参照し，測量器材などを貸借することのできる立場にあったようである。また，スクローテンのもちいた三角測量法は，メルカトルが師であるヘンマ・フリシウス（Gemma Frisius, 1508-1555）から引き継ぎ発展させたものであり，技法上のつながりも大きい。

その他に，モイラーは，1554 年からしばらくスクローテンがカルカーの租税台帳に登場しないこと（町を離れている），また，1558 年に印刷された，クレーフェと

5　Peter H. Meurer（Bearb.）, Die Manuskriptatlanten Christian Sgrootens, Alphen aan den Rijn, 2007,　とくに p. 25 以降を参照。
6　Fernand van Ortroy, Chrétien Sgrooten Cartographie, in: *Annales de la Académie royale d'archéologie de Belgique* 71, 7e Série I, Antwerpen, 1923, p. 171-80.

その周辺地域を表した壁掛け地図が，土地測量から地図への描写，印刷までをつうじた，メルカトルからスクローテンへの“Meisterstück”，すなわち，「親方資格課題作品」であったかもしれないと推測している[7]。

また，クレーフェ北部にあるフェルウェ Veluwe 地方の地図も，この頃に制作されており，同様に高い完成度にあったようである。

このようにして，スクローテンは，16 世紀における最高の地理学者メルカトルの強い影響下で，地図製作者としての第一歩を踏み出すことになったと推定される。

（2）国王地理学者として

1557 年 12 月 2 日, フェリペ 2 世（1527-98, スペイン王，在位 1556-98）は, 滞在中のブリュッセルから, ヘルダーラント州アーネム Arnhem の財務長官宛てに一通の書簡を送った[8]。

そこには,「余の最愛のクリスティアーン・スクロート」が，多大なる労苦と費用をかけてフェルウェの地図を編纂し，フェリペに献上したので，これに報酬をあたえ，国王勤務へと迎え入れたい旨が記されていた。つまり，スクローテンは「国王地理学者」（Regiae Maiestatis Hispaniae Geographus, Cosmographe du Roy）に採用されたのである。

これを受けて会計院は，同月 14 日に，勤務における報酬額をつぎのように定めた。

すなわち固定給は 1 日あたり 6 ステューバー，また，居住地以外での勤務の場合，これに必要経費として 1 日あたり 20 ステューバーが加算される。支払いは毎年 12 月の決済でおこなわれ，勤務は終身，ないしはその地位の取消まで続く。したがって，基本給は年間 109 リーブル 10 ステューバー（＝ 6 ステューバー× 365 日）であり，会計院は 1557 年末に，遡って算定した 12 リーブルを手付けとしてスクローテンに支払った。

要するにスクローテンは，フェルウェの地図の献上により，国王委任官の一人に選ばれたのであった。

ただし，この地位について一般的な職務内容は存在せず，そのつど個別の指示によって活動すべきものとされ，おそらくそれはたいてい秘密保持の義務をともなっていた。じっさいに，スクローテンは翌年 5 月 17 日に詳しい指示を受けるため，ブリュッセルのフェリペのもとに出頭している。

また，国王地理学者は一人とは限らず，このとき地図製作者ヤコブ・ファン・デフェンテル（Jacob van Deventer, 1500/1501-1575）も同じ地位にあった。遅れて 1575 年には，アブラハム・オルテリウスがこの称号をおびており，在任の時期はスクローテンのそれと重なっている。

国王地理学者に選ばれた理由として, その「応募作品」であったフェルウェの地図の完成度が高かったということは，まずまちがいないだろうが，後述する政治的背景を別として，親戚関係の影響も指摘されている[9]。ブラバントの裁判所の法律家であったデニス・スクローテンという人物が，おそらく父ピーテル・スクローテンの弟であり，多くの有力者との関係があったというのである。陰の推薦があったのか，あるいは身元の保証があったのか，いくつかの可能性は考えられるが，しかしその影響力の度合いは推測の域をでないだろう。

いずれにせよ，ここからおよそ 20 年にわたって，スクローテンの国王委任官としての地図製作者の生活がはじまった。1559 年にヘルレ Gelder とズトフェン Zutphen の地図を製作し，1561 年にはエノー伯領南部の地図を，1562 年にはメヘレン Mechelen の地図を製作した。1564 年にはヴェストファーレンの地図を完成している。これらの地図製作のためにカルカーを離れた期間の諸経費だけで, スクローテンには少なくとも 1,253 リーブルが支払われた。

各地での測量には，ブリュッセルのスペイン領ネーデルラント政庁より発給される通行許可証が不可欠であったが，おそらくそれは個別の任務にしたがってあたえられており，より広汎なものとしては，1561 年 7 月 23 日付けの許可証が知られている。そこには,「余の諸州を行脚し, 周辺諸国, 土地, 村落ともども記述すべし」と書かれていた[10]。許可証を提示すれば，器材や助手とともに，城塞のような防備施設にも自由に入城することができた。

こうした国王任務のかたわらで，カルカーから遠く離れた都市アントウェルペンやアムステルダムの市参

7 Meurer, *op. cit.*, p. 28, 48.
8 *Ibid.*, p. 284.
9 Van Ortroy, op. cit., p. 153.
10 Meurer, *op. cit.*, p. 29.

事会員の依頼による仕事も引きうけていた。報酬はそれぞれ 51 リーブル，40 リーブルであった。

かくて，スクローテンの生活は経済的に安定し，1564 年にはカルカーの目抜き通りであるグラーベン通りに面した邸宅を購入することができた。また，同市の聖ニコライ教会の改築のために寄付をおこない，市の発展のために，カルフラーク Kalflak という，ライン川と市を結ぶ運河の建設をユーリヒ＝クレーフェ＝ベルク太公に建議するために活動している。

この頃スクローテンは町の名士の娘アグネス Agnes を妻に娶り，アンナとピーテルと名付けた 2 人の子どもをもうけた。

（3）「アトラス・ブリュッセル」

フェリペ 2 世が，異母姉のパルマ公妃マルハレータ（Margaretha van Parma）を執政にしてスペインへと出立し，その後 1567 年にフェルナンド・アルバ（Fernand Alvarez de Toledo, 1508-1582, アルバ公）がこれに代わってネーデルラントの新たな執政に就任すると，国王地理学者であるスクローテンと王権との関係は，にわかに強化されたようにみえる。このとき生みだされたのが，代表作の一つである，「アトラス・ブリュッセル」であった。

1568 年 9 月に，王権側から 3 つの書簡と文書が立て続けに出されている。

いわく，スクローテンの活動は非難されるべきものでないこと，ブリュッセルのネーデルラント政庁が使用する地図の製作のためにスクローテンに 100 リーブルが支払われること，居住地以外での勤務の諸経費は 2 倍にすること，など [11]。翌 1569 年 5 月には，通達を受領するために，スクローテンはブリュッセルへの即座出頭を命じられた。

「アトラス・ブリュッセル」には，全部で 37 幅の手描き地図が収録されているが（後掲の一覧表を参照），一冊に束ねられていないので，ここでは地図帳ではなく，地図集と呼びたい。それらは大縮尺のネーデルラント諸州の地図と，小縮尺の神聖ローマ帝国の地図の二つに大別される。

スクローテンは，ネーデルラントと北西ドイツについては既存の地図から地誌情報を集め，それ以外の神聖ローマ帝国の諸地方においては，ヘッセン，ヴュルテンベルク，オーバーシュヴァーベンなどで，これまでよりも広い範囲での土地測量をおこなった。さらに，ウィーンやイタリアへも行脚したようである。ときにスパイの嫌疑をかけられたこともあったらしい。1568 年にスクローテンが受領した諸経費は，440 リーブルに達しており，これは 220 日分の「出張費」に相当した [12]。

この地図集は 1573 年ブリュッセルのアルバ公に提出され，その後マドリードのフェリペ 2 世のもとへと送付された。神聖ローマ帝国の全域をこれだけの規模で描いた地図は当時どこにも存在しなかったが，公表も出版も前提とされなかったために秘匿され，19 世紀に骨董商によって再発見されるまで，ほとんど忘れ去られていた [13]。

（4）「アトラス・マドリード」

しかし，スクローテンにとって，「アトラス・ブリュッセル」は，いわば中間報告でしかなかった。1575 年 5 月のスクローテンから財務長官宛ての書簡に添えられた領収書には，国王のもとにある第 1 部の他に，地図の第 2 部が完成されるであろう，と記されていたからである [14]。この「第 2 部」こそが，それからおよそ 20 年後の 1592 年に完成した，「アトラス・マドリード」であった。

この地図集には，38 幅の手描き地図が収録されており，一部は「アトラス・ブリュッセル」から転載されているが，大半は新規に製作されたものである。全体の 7 割が，世界地図を含めた比較的小縮尺の概略図（北欧，東欧，神聖ローマ帝国，低地諸国，フランスおよびブリテン諸島）からなり，残りの 3 割は大縮尺のネーデルラント諸州の地図である。

1573 年の「アトラス・ブリュッセル」には，ネーデルラントの南部諸州が抜け落ちていたことから，スクローテンはこれを未完成と判断し，さらなる完全版をめざしたとおもわれる。地図集の名称は，こんにちこれがマドリード国立図書館に収蔵されていることに由

11　Meurer, *op. cit.*, p. 30
12　*Ibid.*, p. 30.
13　この地図集は 1859 年に骨董商 Louis Prosper Gachard（1800-1885）により売り立てられ，現在はブリュッセル王立図書館所蔵（MS21596）であることからこの名がある。Van Ortroy, op. cit., p. 241-144.
14　Meurer, *op. cit.*, p. 31, 287.

来している[15]。

スクローテンは，二次資料として印刷された地図も補助的に参照しているが，おそらくフランス，スカンディナヴィア，ポーランド，スロヴェニアなど，少なくとも中部ヨーロッパの広い領域をじっさいにたずね歩いて，測量をおこない，北東ドイツ部分でも地図を新しくしている。まさに，地図の総合研究と集大成を図ったのである。

しかし，その完成には多くの困難が立ちはだかっていたようである。スクローテンは，フェリペ2世への献辞の形式をとりながら，地図集の前書きとしてラテン語でつぎのように記している[16]。

いわく，自分の計画と希望は，神とカトリックの信仰，国王，そしてとりわけあらゆる善に対する途方もない反乱により破壊されるかもしれない。全国議会は，彼らの側に鞍替えすることのない自分の名をおとしめ，それどころか命さえ狙うだろう。また，自分と家族は，報酬の支払い停止により困窮し，孤立している，と。

アーネムの会計院からの報酬支払いは1577年に停止され，その直前の支払い請求も1579年になってようやく支払われた[17]。おそらく政変を理由に，国王地理学者としての地位はいったん取り消されていたと考えてよいだろう。

「アトラス・マドリード」は1596年になってようやく，鑑定のためにブリュッセルの新しい執政オーストリア大公アルベルトのもとに送付され，その間の刊行については禁じられた。鑑定には，国王地理学者であったオルテリウスの意見も聴取された。かくて，お墨付きを得て，1600年にこの地図集はマドリードに送付されることになった。しかしそのときフェリペ2世は，すでにこの世を去っていた。

(5) 報酬をめぐる争い

1596年に「アトラス・マドリード」をブリュッセルに「献上」した後も，さしあたり支払われた報酬は，スクローテンの作成した対抗計算書に記載された金額の3分の1に満たなかった[18]。とかくするうち，1598年にカルカーはスペイン軍に占領され，町を焼き払われた。翌年にはペストの流行に見舞われたが，その間スクローテンが家族とともに避難先を見つけていたのかどうかは不明である。

1603年5月13日スクローテンは死去し，カルカーのドミニコ会修道院に埋葬されたことがわかっている。それからおよそ6年後の1609年の最後の支払いにより，地図の報酬をめぐる争いに終止符が打たれた[19]。

2. 政治的背景

(1) ネーデルラントの政治的統合

スクローテンはすぐれた地図の描き手であったが，その代表作である二つの地図集「アトラス・ブリュッセル」，「アトラス・マドリード」のいずれもがスペイン王フェリペ2世との不即不離の関係のなかで生みだされたものであったことは重要である。

こうしてみれば，当時のネーデルラントの政情こそが，魅力的な報酬と引き替えに，若者を地図製作へと引き寄せ，傑出した作品を世に送り出し，同時にまた，その人生を翻弄したのだとおもわざるをえないだろう。

ところで，ネーデルラントの呼称は，16世紀に「低地諸国」を意味するフランス語ペイ・バ Pays-Bas がオランダ語に移し替えられて複数形のネーデルランデン Nederlanden になったもので，元来は一国をあらわす言葉ではなかった[20]。

領域的には，現在のオランダ，ベルギー，ルクセンブルク，そしてフランス北部の一部からなり，もともと公・伯領として分立していたが，14世紀から15世紀にかけてフランス王家の分家であるブルゴーニュ家により婚姻政策と買収をつうじてフランドル，アルトワ，

15 資料番号は，Ms.Res.266である。「アトラス・ブリュッセル」と違って，この地図集にはタイトルページが存在する。正式タイトルは，"Orbis terrestris tam geographica quam geographica descriptio"。
16 Meurer, *op. cit.*, p. 31, 178-181.
17 *Ibid.*, p. 288.
18 Meurer, *op. cit.*, p. 33.
19 *Ibid.*, p. 34.
20 川口博『身分制国家とネーデルランドの反乱』彩流社，1995年，11頁以下，また175頁参照。

ナミュールの伯領，ブラバント公国，ホラント，ゼーラント，エノーの伯領などが獲得され，統合が進展した。このときブラバント公国の首府であったブリュッセルに軸足が移った。

しかしその後，ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレル（突進公）が跡継ぎの男子を遺さず死んだために，フランス北部にあった本来の所領はフランス王に接収され，シャルルのひとり娘であったマリーは「ブルゴーニュ家の遺産」であったネーデルラントを婚資として，ハプスブルク家のマクシミリアンと結婚するも夭折し，その支配権はハプスブルク家へと移行した。

マクシミリアンとマリーの長子フィリップは，のちにスペイン女王となったフアナと結婚したことでスペイン王フェリペ1世となり，ここにハプスブルク家はスペイン王国と合体することになった。ネーデルラントもまたスペイン王国の一部となった。

この二人の長子であったカールは，成人してスペイン王カルロス1世となり，つぎに祖父のドイツ王マクシミリアン1世（神聖ローマ皇帝）が没すると，オーストリアにあるハプスブルク家の本領を相続してカール5世となった（1519年）。カールは，「ブルゴーニュ家の遺産」の周辺でも勢力をさらに拡大し，北部のフリースラント，ユトレヒト，フロニンゲン，ヘルレなどを征服して，これらを一体のものとして政治的に統合することに成功した（法的には帝国クライス Reichskreis とした）。ネーデルラント（低地諸国）という呼称は，この頃に，カールの言葉をつうじて生まれたものである。

（2）フェリペ2世

さて，ここまでがいわば前史である。その後35年を経て，1555年にカール5世がブリュッセルで退位し，ネーデルラントを長子フェリペに譲渡し，その翌年彼がスペイン王位を継承してフェリペ2世となったときに，クリスティアン・スクローテンの物語との「同調」がはじまる。

この頃，ネーデルラントの統合は進んでいたものの，その実態は家産諸州の集積であり，言ってみれば，それらの州の君主がたまたま同じであったにすぎない。一円的な領域をもつ統一国家であったわけではないのである。したがって，フェリペのネーデルラント政策も，在地における対抗勢力の徹底的な排斥と，それと対になった宗教政策を軸に進められることになった。そのなかで，スクローテンの地図も重用されることになったのであろう。

フェリペがブリュッセル滞在中に，スクローテンを国王地理学者に任じたことはすでに述べたが，フェリペはスペインに生まれ育ち，ネーデルラントに滞在した期間はごくわずかであった。具体的には，1549年から約1年間（臣民への「お披露目」のため），そして1555年のカールの退位式直前から1559年にスペインに向けてブリュッセルを発つまでのおよそ4年間がその全期間である[21]。そのためネーデルラントには，君主権を代行するものとして執政職 landvoogd がおかれ，これを補佐するものとして国務評議会 Raad van State が設置されて，カールの代からの腹心であったオラニエ（オランイェ）公ウィレム，エフモント伯，ホールネ伯ら大貴族がその任にあたった[22]。ちなみにウィレムは，ホラント，ゼーラント，ユトレヒトの州総督（stadhouder，各州レベルでの君主権の代行者）であり，後年のスペイン王に対するネーデルラントの反乱の中心的人物である[23]。

フェリペは2度目の滞在中にネーデルラントの現状をよく学び，カトー・カンブレジの和約（1559年）により長年にわたるフランスとの戦争を終結させた。このときフランス軍に対するスペイン軍の勝利（1557/58年）に貢献したのがエフモント伯であった。また，司教区を再編・増設し，カール5世による異端禁止令を更新して，ルター派，カルヴァン派の一掃をめざした。さらに，逼迫する財政を再建するため，全国議会 Staten-Generaal を招集して租税を引き上げようとした[24]。

（3）執政による支配

ネーデルラントを去るにあたってフェリペは，聡明な異母姉のマルハレータを執政に任命したが，1566年4月に，ただならぬ雰囲気でブリュッセルにあらわれた数百名におよぶ貴族たちが異端審問の撤回と特権の回復をもとめて請願書を提出すると，マルハレータはこ

21　C. ヴェロニカ・ウェッジウッド（瀬原義生 訳）『オラニエ公ウィレム―オランダ独立の父―』文理閣，2008年，15，25頁以下参照。
22　川口，上掲書，9頁。
23　現在のオランダ女王ベアトリクスはオラニエ公ウィレムの子孫にあたる。
24　川口，上掲書，34頁。全国議会は君主の諮問機関，すなわち臣民の特権が護持されることを条件に，課税に協賛する機関であるが，じっさいにはそれぞれの州議会が君主のもとに派遣する個別の使節団の集まる場にすぎなかったという。

れに屈し「同意書」を布告した。

この態度が，新教徒過激派の各地での聖像破壊・教会襲撃を招き，激怒したフェリペは，スペインの軍人でカトー・カンブレジの和約にも功績のあった歴戦の猛将アルバ公を，1万の軍勢とともにネーデルラントに派遣し，翌年マルハレータに代えて執政とした。アルバ公は，騒擾評議会（血の委員会）を設置して新教徒や騒乱の責任者をつぎつぎと捕らえ，公開処刑とした。エフモント伯，ホールネ伯もその犠牲となった。その後も，モンス，メヘレン，マーストリヒト，デュイスブルク，ズトフェン，フロニンゲン，アムステルダムと北上しながら軍を進め，華々しい戦果を収めたが，対するオラニエ公ウィレムも，一進一退を繰り返しながらこれを追撃し，1573年ホラント，ゼーラントの後押しにより，ついにスペイン軍に大勝するにいたった。こうしてアルバ公は失脚した。

後任として外交官のルイス・デ・レケセンス（Luis de Zúñiga y Requesens）がまもなくスペインからブリュッセルに到着したが，きわだった成果をあげることなく1576年3月に急死した。

そうしたなかで，同年11月に「スペイン兵の狂暴」と称される事件がおこった。給料の遅配が慢性化したスペイン兵は，各地で略奪に走っていたが，このとき南部の富裕な商業都市アントウェルペンにおいて市民およそ7,000人を殺害し，市の3分の1を焼き払うという大虐殺を引きおこしたのである[25]。これにより，ネーデルラント北部だけでなく南部でもスペインに対する感情が悪化し，ウィレムの側に立つことになった。両者がスペイン軍の駆逐のために協力しあうことを誓う「ヘント（ガン）の和平」が結ばれ，翌年，新執政ドン・フアン（Don Juan de Austria）にこれを認めさせた。しかしこれもまたすぐ反古にされ，全国議会は太公マティアスを執政に擁立した。

やがてスペイン国王に忠誠を誓う南部諸州の「アラス同盟」と，これに対抗する北部7州の「ユトレヒト同盟」に分裂し（1579年），さらにパルマ公アレッサンドロ・ファルネーゼ（Alessandro Farnese）の執政就任と参戦により，イングランドをも巻きこんだ再征服合戦へと発展した。

1588年頃からニーダーライン地方も戦争の舞台となり，ヘルレ，クレーフェ，クールケルンにもスペイン軍が侵攻し，すでに述べたように，1598年にはスクローテンの住む都市カルカーも焼き払われた[26]。ウィレムは，スペイン王に代えてフランス王フランソワを迎え入れることを企図し，国王廃位令を出して対抗したが，まもなくウィレムは暗殺され，その後フェリペ2世も没した。1609年4月にアントウェルペンにおいて12年間の休戦条約が締結され，現状維持が承認されたので，ここに反乱側は一時的であれスペインからの事実上の独立を勝ちとった。

（4）小括

その後も戦争は再開され，ようやく1648年のミュンスター条約により，北部7州はオランダ連邦共和国として独立した[27]。発端の1568年から数えて，ちょうど80年が経過していたので，「八十年戦争」の呼び名がある。

ともあれスクローテンは，まさにネーデルラントの嵐の時代に生きたのであった。これは同時代の多くの地図製作者にもいえることである。なぜすぐれた地図が製作されたのかという疑問に対する回答の一つにもなろう。フェリペは，ネーデルラントを支配下に収めるため地理的により正確に把握しようと意図したのではないだろうか。また，執政アルバ公は，戦略的にこの領域の空間把握を必要としたのだろう。したがって，その情報はたしかに国家の（軍事）機密事項でなければならなかった。しかしながら，「アトラス・ブリュッセル」の成立の時期とアルバ公の早期の失脚を考えあわせると，じっさいにこの地図集がそのために役立てられたかどうかはわからない。だが，さらなる地図集の完成をめざすスクローテンにとってはどうでもいいことであった。

1577年の「ヘントの和平」によって，「軍用品」であったスクローテンの地図はさしあたり必要とされなくなった。あるいは，兵士への給料の遅配が端的にしめすように，財政逼迫が原因であったのかもしれない。いずれにせよ，スクローテンは国王地理学者を解任さ

25 ウェッジウッド，上掲書，230頁。
26 Meurer, *op. cit.*, p. 8.
27 「オランダ」の呼称は，7州の連邦のうちホラント州が突出して有力であったことから，このHollandのスペイン語Hollandaが日本に輸入されたことにはじまる。このときの正式な国名は，「ネーデルラント連邦共和国」de Republiek der Vereigde Nederlandenであり，現在の「オランダ王国」het Koninkrijk der Nederlandenのそれにつながっている。

れ，経済的に困窮し，フェリペに愁訴したように，スペイン王の側に立つがゆえに，生命の危険にさえさらされるようになった。その後ついに新しい地図集が完成し，マドリードへと送付されたときには，フェリペはすでにこの世になかった。最後に，都市カルカーがスペイン軍に蹂躙されたということは，つまりはここは新教徒側にあったということであり，カトリック・スペイン側のスクローテンがそのなかできわめて厳しい立場におかれていたことは想像に難くない。よってスクローテンは，死後も同市の本教会である聖ニコライ教会ではなく，ドミニコ会修道院の墓地にひっそりと埋葬されたのである。

3. 地図の特徴

（1）構成と表現

「アトラス・ブリュッセル」には，ペンとインクで手描きし，そのうえに水彩絵の具で彩色した 37 幅の地図が収録されている。大縮尺の概略地図，すなわち，神聖ローマ帝国の全域をあらわした第 1 図とイングランドおよび低地ドイツを描いた第 2 図は，この地図集がヨーロッパ中央部の地理を写しとったものであることを効果的に表現しており，とくに第 1 図が帝国全域であることは，地図集の製作意図をしめしているという点で重要である。

第 3 図以降の地図は，最初の概略地図を細分した地方図という位置づけであり，第 15 図までがネーデルラント中央部，それ以降がネーデルラントに隣接する地方および領邦，そして小縮尺であらわした神聖ローマ帝国の残りの部分となっている。

これらの地図のうち，ネーデルラント中央部については，この分野の先駆者であり，スクローテンとともに国王地理学者であったヤコブ・ファン・デフェンテルによる印刷地図を参照したものもあるが，むろんたんなる引き写しではなく，細部においてスクローテンの知見が追加，反映されている[28]。デフェンテルはカール 5 世の治世であった 1540 年頃からこの地位にあり，その地図の多くは印刷され刊行されていたので，かりに個人的なつながりがなくとも参照は可能であっただろう。

つぎに，ネーデルラントの隣接地方では，スクローテン自身の土地測量にもとづいた完全なオリジナル地図になっている（全 11 図）。ここには，フェリペ 2 世に献上し，国王地理学者に任命されるきっかけとなったフェルウェの地図も含まれているが，それ以外は新たな測量行脚に由来するものとおもわれる。すなわち，ルクセンブルクからニーダーライン，ザウアーラント，ヴェストファーレン（ウェストファリア）を経てフリースラントにいたるまでの全域が，スクローテンによって独自に製作された最初の地図なのである（第 7，13，14 ～ 17，19 ～ 23）。

スクローテンの地図の特徴の一つとして，モイラーは，1563 年から 1567 年にかけてアントウェルペンにおいて成立したニーダーライン地方の壁掛け地図を例にとりながら，そこにしめされた都市間の距離と方角が，現在の水準での計測とくらべても高い精度で一致していることを指摘している[29]。スクローテンの駆使した三角測量法の技術力が功奏したのであろう。つまり，この都市間の距離と方角の正確さが他のいかなる要素にもまして，スクローテンによる地図表現の「骨格」をなしているのであり，「アトラス・ブリュッセル」にも反映された。したがって，それがアルバ公の矢継ぎ早の都市攻略戦に大いに威力を発揮すると期待されていたとしても，まったく不思議はないのである。

（2）地図集から地図帳へ

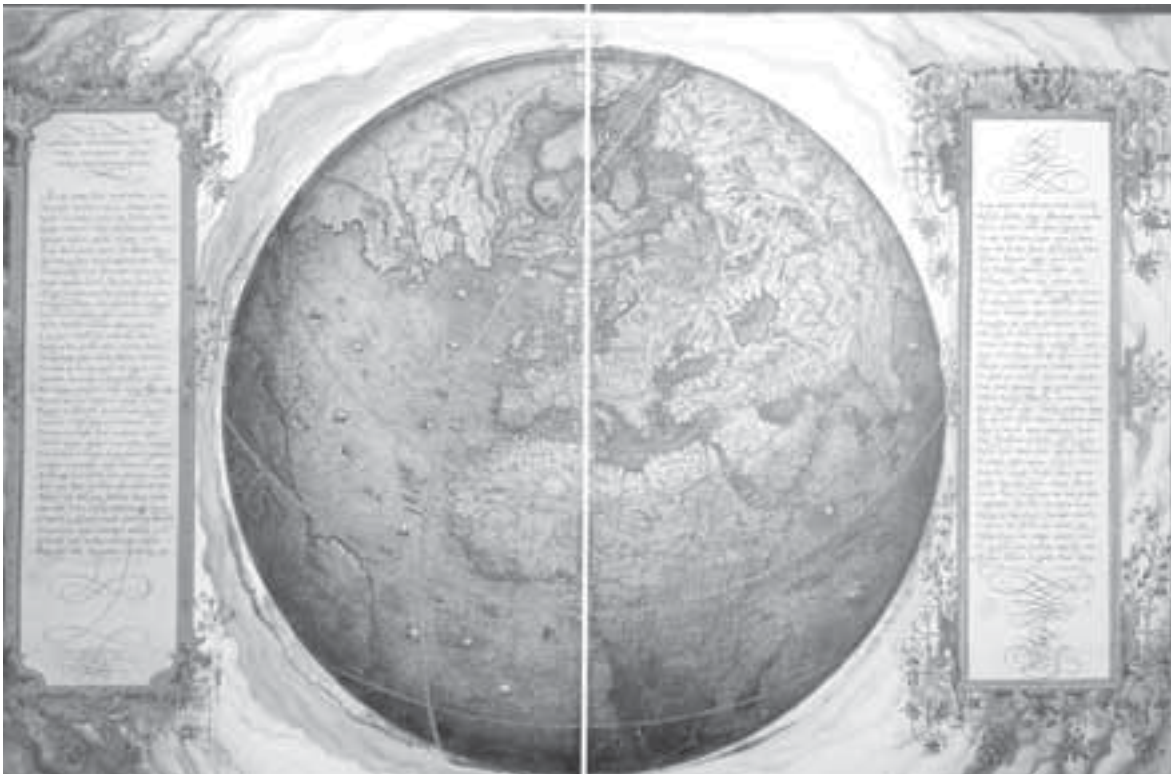
ところで，オルテリウスは，「アトラス・ブリュッセル」におけるオリジナルであるヴェストファーレンの地図を，『世界の舞台』の 1579 年以降のすべての版に採用している[30]。すでに冒頭で述べたことではあるが，これは驚くべきことである。

なぜなら，もっともすぐれた地図を渉猟し収集したオルテリウスがこれに目をつけたことは考えられうるとしても，そもそもこれらの地図は手稿であり，秘密を義務づけられて，発表も印刷もされなかったはずだ

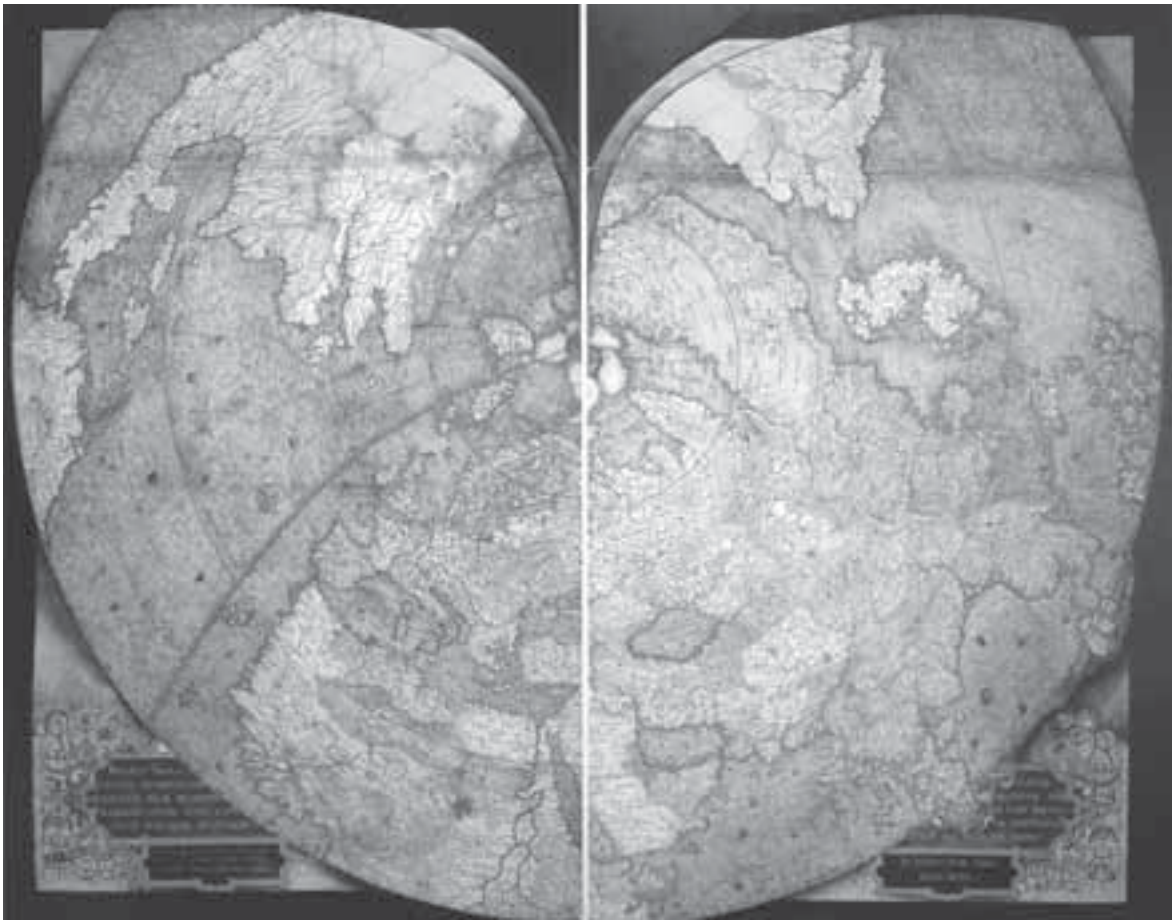
28　Meurer, *op. cit.*, p. 11f., 298f.
29　*Ibid.*, p. 46-51.
30　Marcel van den Broecke, *Ortelius Atlas Maps: An illustrated Guide*, 2nd revised ed., Houten, 2011, p. 293-295.

アトラス・ブリュッセル　第１図：神聖ローマ帝国（ブリュッセル王立図書館所蔵）

アトラス・ブリュッセル　第２図：イングランドおよび低地ドイツ（同上）



アトラス・マドリード　第 1 図：世界図（マドリード国立図書館所蔵）



アトラス・マドリード　第 2 図：北半球（同上）

からである。また，そこには，他のオリジナル地図の地誌情報との類似点も見出される。

オルテリウスとスクローテンの個人的な接触は知られておらず，スクローテン自身による秘密漏洩の可能性は低い。おそらくオルテリウスは，何らかのかたちでこの地図集の手稿を直接スペイン政府から入手することができたのだろう。もしそうであるとすれば，彼の国王地理学者としての地位が有利に働いたのかもしれない。また，時期的にも，地図に対する本来の厳格な運用方法に変化が生じていたとも考えられる。しかしながら，その「緩み」によって地図が入手され，スクローテンの名前は，広く普及したオルテリウスの地図帳のなかに深く刻みこまれることになったのである。

つぎに，スクローテンによれば「未完成」であった「アトラス・ブリュッセル」に対して，「アトラス・マドリード」は，その製作手法は同じであるものの，政治的な拘束から解放されて，人文主義的教養の総合的作品へと飛翔したようにみえる。

全部で 38 幅の地図のうち，最初の 3 つの地図は，「アトラス・ブリュッセル」のように神聖ローマ帝国ではなく，メルカトルの影響を受けて球形に投影された世界地図（第 1 図），心臓形に投影された北半球（第 2 図），

アトラス・ブリュッセルの地図構成

1	神聖ローマ帝国	20	ヴェストファーレン公領
2	イングランドと低地ドイツ（ドーバー海峡）	21	ヴェストファーレン東部
3	ホラント北部と西フリースラント（ゾイデル海）	22	ミンデンとオスナブリュック司教区
4	ホラント北部	23	ミュンスター司教領
5	ホラント南部，ユトレヒト，河口域	24	エムスとアイセル河間
6	ホラント中部とユトレヒト	25	フリースラント
7	ライン下流域，ワール川，マース下流域	26	北ドイツ（ヴェーゼル下流域西）
8	ゼーラントと北フランドル	27	ヴェーゼルとヴァイクセル河間
9	ラインとマースの河口域	28	ドイツ（ヘッセンとシュプレー上流域）
10	スヘルデ河口	29	ドイツ（モーゼル中流域とザーレ川）
11	ブラバント	30	ドイツ（ザール川とアルトミュール川）
12	リュティッヒ司教領	31	西南ドイツ（アルザスとスイス北部）
13	ヘルダーとクレーフェ公領	32	バイエルン公領と隣接域
14	フェルウェ	33	上ファルツとアイヒシュテット司教区
15	ベルク伯領（ライン川の一部）	34	オーストリア大公領
16	ニーダーラインとアイフェル北部	35	ケルンテン，シュタイアーマルク，スロヴェニア
17	ルクセンブルク伯領	36	アルプス領域（コモ湖とヴェネツィア）
18	トリーア大司教領	37	フリウーリ，イストラ半島，バルカン北部
19	ベルク公領とマルク伯領		

アトラス・マドリードの地図構成

1	世界図（球体図）	20	ボヘミア
2	北半球	21	南ドイツとオーストリア
3	南半球	22	ハンガリー，トランシルヴァニア，バルカン北部
4	近東	23	アルプス西部と北イタリア
5	聖地	24	南フランス
6	北欧・東欧	25	北フランス
7	バルト海領域	26	イングランドとアイルランド
8	低地ドイツ	27	スコットランド
9	ポーランドとリトアニア	28	北海領域
10	ドイツ北東部	29	フロニンゲンと西フリースラント
11	東西フリースラント	30	北西ドイツ
12	ネーデルラント北部	31	アイセルとフンテ河間
13	ネーデルラント南部とイングランド	32	ニーダーラインとヴェストファーレン
14	ライン中・下流域，ザウアーラント，ヘッセン	33	リュティッヒ，ユーリヒ，クールケルン
15	ネーデルラントのフランス語圏	34	ブラバント
16	ナミュール，ルクセンブルク，クールトリーア	35	ホラント，ユトレヒト，フェルウェ
17	アルザスとロレーヌ	36	ゼーラント
18	ブルゴーニュ	37	ドーバー海峡
19	中部ドイツ	38	ホラント北部と西フリースラント

そして同じく南半球（第 3 図）となった。これに聖書に関連する近東の地図が続き（第 4, 5 図），さらに北欧・東欧の概略地図, ネーデルラント, 神聖ローマ帝国領域, フランスおよびブリテン諸島へとつながる（第 28 図まで）。その後は，アップデートされたネーデルラント諸州とその周辺地方の地図で締め括られる。

この地図集には，全体としてのタイトル（書名）や緒言も付与されており，地図の構成もより体系的になっている。これらのことから，スクローテンは，これらの地図を地図集ではなく，整然とした一冊の「地図帳」としてまとめようとしていたことがうかがい知れる。

むすびにかえて

スクローテンは，生涯にわたって小都市カルカーを拠点として活動していたが，同じネーデルラントの商業都市アントウェルペンにはオルテリウス，そしてクレーフェの都市デュイスブルクにはメルカトルらのよく知られた地図製作者が同時代人として活動し，その個人的な関係にはそれぞれ濃淡があったものの，彼らは地図をつうじてたがいに影響を及ぼしあっていた[31]。

本稿では，そうした地図製作者たちが勃興した背景の一つとして，当時のネーデルラントの政情が，その活動の基盤をあたえていたのであろうということを，わずかながらでも描き出せたのではないかとおもう。スクローテンは，それ以外の要因よりも政治的な要因に，すなわち，スペイン王フェリペ 2 世や執政アルバ公らとの関係のなかで，みずからの地図製作の大きなモチベーションをあたえられていたために，かえって作品の大半は秘匿され，世間に公表する機会をついに逸してしまった。

しかし，スクローテンはいわゆる御用学者ではなかった。あくまで地図製作の本道をゆこうとして，すぐれた作品を作りあげ，その結果，オルテリウスの地図帳のなかに，たしかな活動の痕跡を残したのである。言い換えれば，オルテリウスやメルカトルらの代表的な地図帳も，他の多くの地図製作者の艱難辛苦を乗りこえたさまざまな成果を利用することではじめて成立したものであった。

ネーデルラント（オランダ）の人びとは，とくに商人たちは，そのような地図をたずさえて世界各地へと進航し，やがて 17 世紀には，世界の商業的覇権を握ることになった。そして，地図はその目的地においても抜露され，伝写されたことで，その地での「世界観」を左右するものとして作動し続けることになるのである。

東北大学附属図書館の所蔵する貴重図書には，マテオ・リッチ（Matteo Ricci, 1552-1610）の「坤輿万国全図」（写本）などの地図資料も含まれるが, これもまた，いうまでもなく，オルテリウス，メルカトルらの地図帳の影響を受けながら生みだされたものであった。こうした資料を評価するノウハウは，いまのところ（附属図書館では）ほとんど蓄積されていない。

この小論が，それらの成り立ちを考察する視野をひろげるための一助となれば，これにまさる喜びはない。

（おがわ　ともゆき，学術資源研究公開センター・
総合学術博物館助教，附属図書館協力研究員）

31　たとえば，メルカトルはオルテリウスと友人同士であったが，スクローテンにオルテリウスとの交際は知られていない。また，メルカトルはスクローテンと師弟関係にあったかもしれない。少なくとも共同作業のあったことは実証されている。